ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館　編集：松居友
５７号・２０１６年１２月

ミンダナオ子ども図書館の中で
一緒に生活している、イスラムの子、
クリスチャンの子、先住民の子たち。
彼等は、言う。
「宗教や部族がちがっていても、一つの家族
わたしたちは、みんな兄弟姉妹！」
ＭＣＬのクリスチャンの子たちが言った。
「パパ友、この村にはモスクがないよね。
ムスリムの子たち、お祈りするところが無くて
可愛そうだよ。ＭＣＬの中に、
モスクを建ててあげて！」
そこで、日本の教会の方に尋ねると、
日本イスラミックセンターに連絡して、
合同でモスクを献造してくださった。
８月のラマダンになると、皆で雑草を刈って
周りに、お花を植えてあげる。
さらに、あるクリスチャンの子は、言った。
「わたし、今年、ラマダンやってみる！」
さて、今年も、もうじきクリスマス。
ミンダナオ子ども図書館でも、皆でお祝い。
もちろん、ムスリムの子たちも加わって、
歌ったり、踊ったり、そして最後に、
プレゼントを交換し合う。
「クリスマス、おめでとう！」
山を動かすような強い信仰を持っていても、
大きな夢や野望を抱いていても、
愛がなければ、無に等しい！
信仰、希望、愛
そのなかで最も大いなる物は、愛と友情！
（クリスマス時期に、皆さんに絵本を送る予定でしたが、
まだ制作中で、春頃に延期させて下さいね。）

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

12月の物乞いたち

宮木　梓

クリスマスがやって来る。ダバオに行くのが憂うつになる。

所在がなくなるほど大きい、セメントの箱のようなショッピングモールの、ピカピカでつるつるの床。一番目立つところにそびえ立っている、白々と明るすぎる照明に照らされた、クリスマスツリー。金色と赤のリボンに飾り付けられた、てっぺんの星が2階まで届きそうな、南の国のモミの木。

軽快で軽薄な、販促のクリスマスソングが、耳に纏わりつく。色とりどりの商品が、きらびやかにデコレーションされ、クリスマスのプレゼントに私を僕を、買って、買って、と自己主張している。

ショーウインドーには、バタークリームがこってり塗られた、ピンクや緑の甘い毒薬のようなケーキが並ぶ。スパゲティや、真っ赤なバナナケチャップ、フライドチキンの素、子豚の丸焼きに添える甘くてとろりとしたソース、コンデンスミルク、ビスケット。クリスマスのご馳走を作る材料たち。

ツリーの前で、スマートフォンをかざして気取ったポーズを決めている、華奢なエナメルのハイヒールや、汚れのないスニーカーの群。ひらひらと揺れるふわりと軽いワンピースの裾、クリスマスソングと張り合う嬌声、スタンプを押したような笑顔、笑顔、笑顔。そのまま、それを、フェイスブックにアップ。

ばっかみたい。

心の中でつぶやく。声に出して、日本語で「ばっかみたい！」って叫んでみたところで通じないのだろうけど、せっかく欧米風のクリスマスを楽しんでいる人々に水を差したくない。それに、わざわざ口に出さなくたって、私の顔は大声で「ばっかみたい！」って叫んでいるだろう。

でも、眩しすぎるクリスマスツリーに目隠しされているお客さんたちは、ふくれっつらで歩く私には気がつかない。

こちらでは、クリスマスのことを「パスコ」という。

パスコが近づくと、ダバオの町に物乞いが増える。アラカンの山の方から、少数民族が物乞いに下りてくるのだそうだ。それは、12月のダバオの風物詩になっていて、街角にマノボ族の衣装を着て、民族楽器を持った人たちが物乞いを始めると、こちらの人は「ああ、パスコだなぁ」と感じるらしい。物乞いが、クリスマスの風物詩、ねぇ。

ショッピングモールの、排気ガスで息苦しい駐車場から、ダバオの町に吐き出される。車窓から眺める、夕暮れに沈んでいくビルや家々、白熱灯が灯り始めた露店、野菜や肉を物色する仕事帰りの人の波、渋滞のテールランプ。

夕空より先に、濃紺の影に入った路上に連なる、物乞いのおじいさんとおばあさんとお父さんとお母さんと子どもと赤ちゃんたち。白い半月と、街明りにかすむ星くずの下で、道端にしゃがんだり、段ボールの上に横になっている。路肩が、家族の団らんのリビングのように見えて、戸惑う。車の窓ガラスで隔てられた彼らを、ただ、見つめる。

日本で物乞いを見ることなく育った生っちょろい私は、家にたどり着いても、鶏や豚の煮物や、魚のスープに感情が反抗する。反抗をなだめて食べるけれど、おいしくない。楽しくない。クリスマスにはダバオに行きたくない。

昨年の12月。アラカン出身のマノボ族のスタッフに、「クリスマスにはダバオに行きたくないんだよ。」と、こぼした。

すると、彼の薄茶色の瞳が、陽がさしたようにぱっと明るく輝いた。そんな笑顔だった。予想外の反応だった。

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。メール：mcltomo@yahoo.co.jp
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

「今、僕の姉さんの家族はダバオに行っているんだよ。」

それが、彼の姉が、家族でダバオに物乞いに行っているのだとつながるまでに、少し時間がかかった。「ダバオの物乞いの家族」が、身近な人につながらかったのだ。

「でも、どうして物乞いをするの。私、ダバオで物乞いの人たちをじっと見ていたの。小銭を渡す人なんて、少ししかいやしない。小銭ではパンが一つ買えるくらいだよ。お金を稼ぐのに、効率のいい方法とは思えない。」

「あれはね、物乞いで稼ぐつもりはなくて、政府からの米の支給を待っているのさ。」

「まあ、そうなの。」

「貧しい人たちがダバオの路上で寝

転がっていて、しかもクリスマスの近い12月でしょう。地方政府もそういう人たちを無視しておけないんだよ。しかもね、お米やティンナッパ（頭のないイワシのケチャップ煮の缶詰）を準備するのは、ダバオ市なんだ。僕たちの住んでいる、物乞いたちの故郷のコタバト州でなくてね。

僕たちは州境を越えて、ダバオやカリナンの町に物乞いに下りて行くでしょう。本当は、コタバト州が貧しい州民を助けなきゃならないはずのに、ダバオ市は可哀想だよね。僕たちの村からも、12月になると、物乞いに行く人たちで協力して、ダバオやカリナンに行くためのジプニーを借りるんだ。」

付け足しのように、彼が言う。

「僕もね、一度、家族がカリナンに物乞いに行くのについて行ったことがあるんだよ。」

「誰かに、お金を、食べ物を、恵んでくださいと、手を差し出したことがあるの？それでお金はもらえた？どん

な気持ちだった？」

「僕は、実際に物乞いをしなかった。山から下りて来た人たちと、カリナンで野宿しながら、食料の支給を待っていただけだよ。でも、もう2度と行きたくないな。3日間、顔も洗えなかったし、歯も磨けなかった。」

どうしても、物乞いに行かなければならなかったわけではなく、経験してみたかったのだ、と彼は微笑を続ける。

「それでも、そこにも生活があるんだ。物乞いに行って、そこで出会って結婚するカップルもいるし、子どもが生まれることもあるんだよ。」

彼が、あっけらかんと可笑しそうに笑うので、私もつられて笑ってみる。一緒に笑ったみたところで、彼らと同じ場所に立てるわけでもなく、理解できるわけでもない、と、どこかで思っている。

今年も、クリスマスが近づいてくる。この国は、9月に入ればクリスマスシーズンだ。クリスマスが終わった直後から、次のクリスマスを楽しみに1年を過ごすのだという。

10月の終わりのMCL。晩ごはんの後、ギターに乗せて、楽しくてしょうがないという風な歌声が聴こえる。眼を閉じて、夜風に耳を澄ます。

「…とりあえず、めでたくメリークリスマスって歌っていようよ！

借金なんて忘れてしまおう。来年の心配なんてせずに、愛する人と一緒に過ごそう。豚の丸焼きやフライドチキンが準備できなくても、ギナモス（塩辛）を食べようじゃないか。ギナモスだったら歯がなくたって平気さ…。」

橙色の明りがにじむ窓から、子どもたちの、笑い転げる声がこぼれて落ちてくるのを、両手でそっと掬い上げる。

暗闇に静かに佇んでいるグアバの木の側を、精霊の涙の一粒のような蛍の火が、すうっと尾を引いて落下し、夜に溶けてはまた灯る。クリスマス休みに、みんなが家族のところへ帰れるまで、もう少しだな、と思う。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

前号の最終部分より

（妻のエープリルリンが、少女時代からミンダナオ子ども図書館に至るまでの、自分の体験を書いていきます。

初回は『手をつなごうよ』（彩流社）に掲載しましたが、その後はこの誌上で連載していきます。

機関誌は、寄付を下さっている方々にお送りしています。　松居友）

コケコッコー！

鶏の鳴き声がして目が覚めた。

早朝、お日様が顔をだした。

朝食の用意が出来ていて、学校に行く支度がすむと、私は浴室で水浴びをした。

すると、おばあちゃんが叔母さんに、こう話しかけているのが聞こえてきた。

「わたしは、妹のジェクを家に連れていくわ。あなただけで、二人の子どもの面倒をみるのは、大変そうだから。エープリルを、ここに残してね。」

とつぜん、私の目から涙がこぼれてきた。

何も聞いていなかったような顔をして、部屋のなかに入っていくと叔母さんが言った。

「学校に行く用意はできた？」

「ええ。」

そう答えたものの、妹が私を置いてきぼりにして、行ってしまうかと思うと、寂しくって言葉を継ぐことも出来なかった。

妹のジェクは、申し訳なさそうに言った。

「私、おばあちゃんの所に行くことになったの。」

「ええ」私は、それしか答えようがなかった。

おばあちゃんが、叔母さんに言った。

「ビン、それじゃあ、私たちは、出かけるからね。」

「わかったわ。お気をつけて。またいらっしゃってね」

私たちは小道に出ると、私は学校に向かい、おばあちゃんと妹のジェクは、おばあちゃんの家に行くために乗り合いジープの停留所に向かった。

私は、妹に言った。

「元気でね。おばあちゃんのところで、いたずらっ子したら駄目だよ。いい、わかった。」

そして、私たちは、抱きあってそれから、さようならを言った。

そして、手をふりながら、私は、妹とおばあちゃんの姿が見えなくなるまで見送った。

わたしの少女時代の思い出から（4）

松居　エープリルリン

学校に向かって歩きはじめたけれど、あいかわらず涙がほおを伝わって流れ落ちていった。

そのとき、ふっと頭の中に、学校に行くようになる前に、まだ山のなかの祖父母の家のそばに住んでいた頃の懐かしい想い出が浮かび上がってきた。

まだ小さな子どもだったころ、わたしたちは山の奥の集落に住んでいたの。まわりに親戚の人たちの家が5軒ほどしか建っていなかったわ。セブから移住してきたわたしの祖父母をのぞいて、みな先住民のマンダヤ族の人たちだった。

マンダヤ族の人たちは、精霊を信じていて、森や野原には、たくさんの妖精たちや先祖の霊たちが住んでいると思って生活していた。

斜面にトウモロコシを植えて、わずかばかりの陸稲を育てて、ココナッツと地中に植えたサツマイモやカサバイモ、紫イモやサトイモを掘って生活をしていたの。わずかばかりの鶏を飼って、川から魚を捕って、ときには山の奥でイノシシや鹿を捕獲して来たりしたけれど、現金収入は山の下の村の人々が持っている田んぼのあぜの草刈りや、家々をまわって洗濯物を集めて日銭を稼ぐぐらいがせいぜい。

学校に向かって歩いている私の心に浮かんできたのは、おばあちゃんと下の川に洗濯に行ったときの想いで。

おばあちゃんといっしょに洗濯に行くとき、川は私の大好きな場所だったの。

「リン！」おばあちゃんが、わたしを呼んでいる声がする。

「こっちにおいで！」

近くに行くと、おばあちゃんは言った。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。
貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。
保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている
２００名ほどの奨学生の食費、生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。

「さあ、これから下の川に洗濯に行くよ。いっしょに来るかい？」
「もちろんいくわ！」
「わかった、お母さんにひとこと言っておいで。」
わたしは、膝までとどくシャツを着て、ぶかぶかですぐに落ちてくるジョギングパンツを引っぱりあげながら、裸足で家にかけていった。
私たちの家は、祖母の家からそれほど離れていなかったの。
家と家のあいだには、飲み水をくむための小川があって、竹を切って筒を作って、それを水くみに使っていたの。
集落の外れの小川につくと、川岸の草木の香りがして、こずえから小鳥たちの声にのってそよ風が吹いてきて、せせらぎの音が聞こえてくる
エサを探して歩きまわっているニワトリの鳴き声に混じって、大声で話す母さん声も聞こえてきた。
「ママ！」わたしは母さんを呼んだ。
「おばあちゃんと、下の川に洗濯に

行ってくるね。わたしたちの服も洗ってくるよ！」
「わかったわ、いってらっしゃい！」
わたしは、家にある洗濯物を集めて石けんをいれたカゴといっしょにタライにつめると、タライを頭にのせて大急ぎでばあちゃんの所に向かった。
ばあちゃんの家につくと、わたしたちは、サツマイモとカサバイモに塩とトウガラシを添えたお弁当をもって川に向かった。
わたしは、下の川で洗濯をするのが大好きだった。着物を洗濯して、乾いた岩の上にのせて乾かしているあいだに、わたしはザブーンと水のなかに飛びこんで水浴びをした。
お水は、透きとおって冷たくってとっても清んでいて、遠くから見ても川底の小石が見えたほど。わたしは、川

底の石をどかして、川砂をほってお風呂を作った。
川岸には、大小の石や岩がならび、大きな木や草が生えていて、マンゴーやバナナやポメロ、サントルやガバの実がなっているの。

とつぜん、学校の鐘が鳴る音が聞こえた。

わたしは、びっくりして子どものころの想い出から、目を覚ました。学校にいそがなくっちゃ、国旗掲揚にまにあわなくっちゃ！もう少しで遅刻しそう！どきどきしながら、幸せな子ども時代の想いでから飛びだすと、国旗掲揚式の列に飛びこんだ。
クラスメートの友だちは、わたしの顔を見るといぶかしげに言った。
「どうして、そんなに悲しそうな顔をしているの？」
「何かあったの？」
けれども、何も答えられず、ただ首を横にふるだけだった。しかし、友だちは心配して、なっとくしなかった。
「何かあったんでしょ。言ったら良いのに。」
わたしは、自分のほおに涙が伝わって流れているのに気づかなかった。
そこで、友だちたちは、わたしを抱きしめると、慰めてくれた。

本を買って下さるのも、寄付支援の一つになりますよ！

「サンパギータのくびかざり」
今人舎　定価 1600 円

「手をつなごうよ」
彩流社　定価 1800 円

「わたしの絵本体験」

「昔話とこころの自立」
教文館　定価 1400 円

「昔話の死と誕生」

これらに関わらず、松居友の著作の著者印税は、全額をミンダナオ子ども図書館に寄付しています。
寄付と言うよりも、ＭＣＬの子どもたちと私たちは、皆で一つの家族だから！

支援者の皆さんも、セカンドハウスのつもりで、いつでも訪ねていらしてくださいね。
ダバオ国際空港に着く時間を、メールで宮木梓さんに教えていただければ、お迎えにあがります。
特別な接待はしませんが、宿泊料もとりません。食事も子どもたちと一緒。
なぜなら理由は、子どもたちといっしょに、家族として皆さんを、友情と愛で迎えたいから！！！

この子たちの支援者になっていただけませんか！

Chresha S. Lozada　8歳　タウソグ族　カラスヤン小学校3年生

私の名前はクリシャ。MCLのあるキダパワン市のマテオというところに、お父さんとお母さんと兄弟姉妹と一緒に住んでいます。私は7人兄弟で、5番目に生まれました。誕生日は2008年9月18日です。6月に小学3年生になりました。

私たちはタウソグ族で、イスラム教を信仰しています。ミンダナオにはたくさんの少数民族がいて、同じイスラム教を信仰していても、マギンダナオ族やタガカオロ族など、ことばや文化が違うんですよ。

お父さんは44歳で、ココナッツの実の収穫の仕事をしています。お母さんは、バナナやマンゴーなどの果物売りをしています。でも、ココナツ畑の仕事のお給料や果物を売ったお金だけでは、私たちが小学校で使うノートや鉛筆、宿題に使う色紙や模造紙を買うことができません。

私を含めて兄弟4人が学校に行っているけれど、お家は、お米や油、おしょうゆ、せっけん、歯磨き粉を買うのも大変です。でも、学校に行きたいのでMCLの奨学生に申し込みました。

私の夢は、学校を卒業して看護婦さんになることです。看護婦さんになれば、ちゃんと就職できて、家族を助けることができるでしょう？

私の家族はみんな仲良しで、兄弟や近所の友達と遊んでいるときが一番楽しいです。2人の弟たちのためにも、勉強を頑張りたいと思います。

Jovelyn E. Salana　14歳　マノボ族　マノンゴル小学校4年生

私の名前はジョベリンだけど、みんなにはデンデンって呼ばれています。14歳だけど、まだ小学4年生です。出身はプレジデント・ロハスのグリーンヒルズにある、プロック・オッチョという村です。

私には、お父さんとお母さんがいません。物心ついたときには、おじいさんとおばあさんに育てられていました。お父さんとお母さんの顔も覚えていないし、写真もありません。私が4歳の時に2人はいなくなりました。

どうしていなくなったのか、なにも覚えていません。でも、村の人や友達や、祖父母は事情を知っているみたいです。お父さんがお母さんに嫉妬して、ナイフで刺殺して、逃げて、そのまま戻ってこないらしいです。お母さんがお父さんに刺された時、私はお母さんを守りたくてお母さんに抱き付いていたというけれど、なにも思い出せません。私がとても怖がりなのは、その時の経験が原因だそうです。

私の家は、とても貧しいです。おじいちゃんとおばあちゃんは箒を作って売りに行ったり、お米のもみ殻を飛ばす仕事をしてお金を稼ぎます。でも、おばあちゃんは病気がちであまり働けません。

私には、13歳で小学3年生の弟がいますが、お金がなくて、学校に行けないことも多かったので、学年が遅れています。朝ごはんは食べません。お昼と夜は、バナナと小さくて塩辛い干し魚を食べます。バナナの代わりに、キャッサバ芋や里芋を食べる日もあります。お米やトウモロコシご飯は、ときどきしか食べられません。鶏を絞めたお祝いの日は、鶏のしょう油煮が食べられるからうれしいです。私の一番好きなおかずです。

ご飯がないと、学校に行くのがつらいです。お米がないからお弁当を持って行けないし、朝ごはんもちゃんと食べられないから、歩いて学校に行くだけで疲れてしまいます。進級できないで、学年が遅れていってもあきらめないで学校に行っていたのは、貧しくても学校を卒業したいからです。できれば大学を卒業して、小学校の先生になりたいです。

私が大学を卒業できるころには25歳になっているはずだけど、それまでは結婚しないで勉強します。高校生になって、好きな人に「I love you」って言われても、勉強を選びます。…たぶん。学校を卒業するまではMCLの寮でがんばりたいけど、卒業したら故郷に帰って、そこの小学校で教えて、結婚したいな。私の家族は祖父母、弟、みんな仲良しなんですよ。ほとんど毎週教会に行って、神様に家族のことをお祈りしています。つらいこともあったけど、MCLに来て友達がたくさんできました。友達と励まし合って、夢を叶えたいです。

Rostan A. Sabino　16歳　マノボ族　マノンゴル高校2年生（6年制）

僕はロスタン。デンデンと同じグリーンヒルズのプロック・オッチョの出身です。この8月に、同じ村の奨学生5人でMCLに移ってきました。僕たちの村はとても貧しくて、食べていくことも難しいから、奨学生で支援があっても学校を止める子が多かったんです。MCLに住むと3食食べられるし、学校も近いから、僕は両親がいるけれど、ここから通学することにしました。

プロック・オッチョにいたときは、朝6時に家を出て、学校に着くのは8時くらいでした。でも、大雨で水があふれたり、道が泥だらけになると、歩くのに時間がかかって遅刻してしまうことも多かったです。

僕のお父さんは、農民です。ココナッツの実やゴムの樹液、バナナや建築用の木を育てて売っています。それから、

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から「年間のスケジュール」をクリックすれば、
空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。メール：mcltomo@yahoo.co.jp
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

自家用にトウモロコシ、三度豆、空芯菜、里芋、オクラ、ハヤトウリ、ジャックフルーツを育てています。お母さんは主婦です。僕は５人兄弟の上から２番目で、まだ幼稚園の弟がいるので、お母さんは子守りや洗濯、水汲みで忙しいです。兄弟は５人とも、みんな男の子。長男も MCL の奨学生だったけど、昨年結婚して勉強を止めてしまいました。もう、子どもがいます。

僕の家は３食食べられるけど、朝ごはんはバナナとコーヒー、昼と夜はご飯と野菜で、ときどき魚や肉を食べます。家で鶏を飼っているけど、お祝いごとに食べてたら少なくなっちゃった。

僕は、大学を卒業してエンジニアになりたいです。でも、困ったことに、数学がものすごく苦手なんです…。勉強は好きなんだけど、英語も苦手です。MCL に来る前は、食べ物がなかったり、大雨などでよく学校を休んでいたから、高校２年生になっても英語があまり分からないし、引き算も繰り下がりがあるとたくさん間違えてしまいます。でも、MCL に来てからは毎日学校に行けるから、勉強がんばりたいな。タガログ語はまあまあなんです。もし、数学の点数が足りなくて、大学で工学部に行けなかったら、タガログ語の先生を目指します。

MCL には友達がたくさんいて、賑やかで楽しいけれど、やっぱり家族が恋しいです。僕は、お母さんと特に仲がいいんだ。クリスマスのお休みに家に帰れるから、本当に楽しみ！家に帰ったら、弟たちとたくさん遊んであげて、お母さんの水汲みや洗濯を手伝いたいです。いっぱい冗談を言って、おもしろいダンスをして、みんなを笑わせたいです。お兄ちゃんが学校を止めて、僕だけが高校に行っているから、しっかり勉強しようと思います。

Lorna L. Apang　19 歳　マノボ族　マノンゴル高校５年生（6 年制）

私の名前はロルナで、アラカンのキアタオ村出身です。昨年度までアラカンのラナオコランにある MCL 女子寮にいたけれど、ラナオコラン高校は、高校４年生までしかないので、この６月にマノンゴル高校に転校しました。

私たちの学年から、高校が６年制になったのですが、山の高校はまだ準備ができていないまま制度が変わっちゃったの。MCL の奨学生でよかった。奨学生でなかったら、高校４年生を卒業したところで、勉強を続けることをあきらめていたかもしれません。

私が小学生だったころ、キアタオにはプライマリースクールしかなかったから、５年生になるとラナオコラン小学校まで歩いて通っていました。朝３時に起きて、４時に家を出て、学校に着くのは７時ごろでした。授業が終わって、また３時間の道のりを帰宅すると、すっかり夜になっていました。ラナオコランに MCL の寮ができて、そこに住めるようになり、本当に助かりました。今、高校５年生まで勉強してこられて、とても感謝しています。

私の家族は、少し複雑です。私が小学５年生の時に、両親が離婚しました。私たちは５人姉妹、みんな女の子です。私は末っ子なんだけど、お父さんはどうしても息子が欲しかったみたい。それで、違う女の人、たぶん昔の恋人なんですけど、その人の男の子の赤ちゃんを養子にしようとしたんです。ただ、それがお父さんの本当の子どもらしいってことが分かって、お母さんがショックを受けて、けんかになって、それで別れてしまいました。

お父さんは、結局その昔の恋人と再婚して、今はその人との間に子どもが２人います。お父さんとは、別れた後もときどき会って、お金を助けてくれたこともあります。離婚する前はお父さんと仲が良かったし、好きだったけど、今はときどき好きじゃない…。お父さんの新しい子どもたちに、嫉妬しちゃうんです。お母さんは、もう結婚したくない、と言っていたけれど、叔父さんに勧められて３年前に再婚しました。新しいお父さんは、トウモロコシやバナナを植える仕事をしています。おかげで家族は３食食べられます。

私は、高校の体育の先生になるのが夢です。2018 年に高校を卒業したら、南ミンダナオ大学の教育学部で勉強したいです。ダンスが好きで、MCL の学生総会のマノボ族の文化祭で踊ったダンスは、生まれ育ったキアタオで見て、覚えました。大学を卒業して先生になる国家試験に受かったら、アラカンに戻ってラナオコラン高校で教えたいです。きっと、その頃にはラナオコラン高校も６年制の高校になっているはず。

キダパワンで大学を卒業して、ダバオやマニラ、海外に出る奨学生もいるけれど、私は故郷に戻りたいんです。アラカンの山々や、人たちが大好きです。だから、結婚するならダバオの男の子じゃなくて、山の人ですね。でも、キアタオ村の男の人はダメ。私たち、みんないとこ同士なんだもん。それから、農業とか大工とか、高校を卒業せずにできる仕事でなくて、大学か職業訓練校を出て、専門的な仕事に就いている人と結婚したいな。子どもはたくさんいると大変だから、２人くらいがいいかなって思います。あと１年と少しでやっと高校を卒業できます。先生になる夢をあきらめないで、勉強したいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

小学生（里子）：年間４万円、高校生：６万円、大学生：７万円です。
極貧のなかでも、孤児や崩壊家庭の子で、イスラム、クリスチャン、先住民を均等に採用しています。
支援者の方が、訪問された場合、奨学生に会いに家までお連れします。
ほとんどの子たちが大喜びで、時には抱きついて泣き出します。
MCL に滞在してください。家族ですので、空港までお迎えに上がり、宿泊費はとりません。

上の子たち以外にも、いまだに140名ほどの子たちに、支援者が居ません。
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」から「まだ支援者のいない子たちへ」をクリック
パスワード：mindnao で、紹介されています。ご覧ください。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

卒業生たちの過去の想い出と今（1）

先生になったクインクインと、トヨタの社員になったボンボン
執筆　クインクイン

子どもたちは、人々に、特に両親から愛されるために生まれて来るのだと思います。そんな親を持って生まれた私は幸せでした。私たちは、質素な一家でした。父さんと母さんと一緒に、幸せな日々を送っていたのです。

しかし、２００６年の１月２２日に、突然父が死んだときには、家も土地も、何も残っていませんでした。（父親は、牧師）そのようなわけで、ミンダナオ子ども図書館に来る前までは、弟も母も私も、別々に暮らさらずを得ませんでした。

私は、就労学生として、先生の家で働きながら学校に通いました。私も弟も、田んぼでお米の刈り入れをしたり、畑にトウモロコシの種を蒔いたりしました。

高校を卒業した後は、大学に行くことが出来ませんでした。お金が無かったからです。私と弟は、母がお手伝いをしている家に移り住み、母の仕事を手伝って、掃除や家の仕事をして暮らしていました。午前２時には起きて、夜の１１時に寝る毎日でした。

私は、どうしても大学に行きたくて、私たちの住んでいる家の近くに、ミンダナオ子ども図書館がある事を知ったとき、スカラシップに応募する決心をしました。２００９年の９月の事です。

弟のボンボンの卒業式

ちょうどその頃、友さんと妻のエープリルさんは、娘さんのベビーシッターを探していました。そして、母が選ばれて、私たちは弟もいっしょに家族で、ミンダナオ子ども図書館に住むことが出来たのです！

その年の２０１０年１月には、私と弟を支援して下さる方も見つかって、春から私は、ミンダナオ子ども図書館の奨学生として、フィリピンのミンダナオ州立大学で教育学を学び始めました。

私は、一生懸命に勉強に励みました。

そして、２０１４年の４月８日に成績優秀で表彰されて卒業できました。弟も、今年大学を卒業できたのです。卒業後も、ミンダナオ子ども図書館の支援で、先生になるための国家試験を受けて、同年の１１月には合格しました。

とってもうれしかった！

そして今私は、キダパワン市の私立高校で先生をしていますし、弟は、ダバオ市のトヨタ自動車の営業所で社員をしています。

私の卒業式

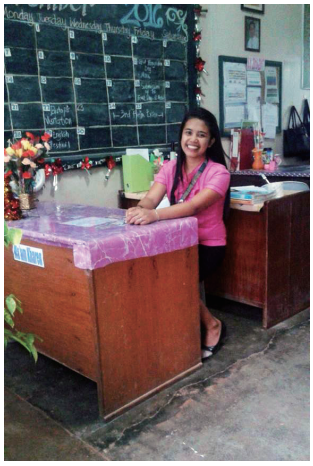
ミンダナオ子ども図書館と、ここまで支援し続けて下さった支援者の MASAKO IKEDA 様がいらっしゃらなかったら、大学を卒業することは不可能でしたし、今の私も無かったでしょう。

弟も、本当に楽しそうに仕事をしていますし、そんな私たちを見てくれる母も、とっても幸せそうです。

私にとって、ＭＣＬの奨学生になれたことは、心からの喜びです。その機会を与えて下さった友さん、エープリルリンさんに感謝しています。

そしてとりわけ、私たちの支援者になってくださった方々に、心の底から感謝しています。今の自分があるのは、こうした方々のおかげです。

本当に、本当に、ありがとうございます！



私立高校の先生になりました

弟は、トヨタ自動車の営業マンに

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、
母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。
その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。
学費の他に、食費、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

ミンダナオに踏み込んで15年

松居　友

ミンダナオ子ども図書館が、フィリピン政府の特定非営利法人を得たのは、2003年の事です。

それから最初の10年は、毎年のように、イスラム地域で起こる戦争や戦闘から、避難生活を余儀なくされている現地の家族や子供たちを救済支援したり、もともと平地に住んでいて、それなりに豊かな生活をしていたにもかかわらず、国際資本と連携した富裕層に土地を買い占められて、バナナやパイナップルのプランテーションが切りひらかれ、時には戦闘を起こすことによって平地から山岳地帯に追いやられ、想像以上の貧困状態に陥ってしまった先住民の子供たちの支援などで、本当に光陰矢のごとしでした。

戦闘避難民のイスラム教徒の家族たち

ミンダナオ子ども図書館のあるキダパワン市は、ダバオから望めるフィリピンの最高峰アポ山（2954m）の裏側の高原地帯にある小都市です。

小都市であっても、国立公園であるアポ山の登山口として名を知られており、周りを果樹園で囲まれていて「ミンダナオのフルーツバスケット」と呼ばれている素朴で美しい街です。

避難民のための雨よけを張る、MCLの若者たち

学園都市でもあり、州立大学も私立大学もいくつかあり、ミンダナオ子ども図書館の奨学生の多くは、MCLの下宿施設に住みこんで衣食住を保証されながら大学に通っています。

総合病院も数棟あって、なかでもドクトル・スペシャリスト病院には、CTスキャンも整備されていて手術も可能で、ミンダナオ子ども図書館の医療支援はこの病院との連携で行っています。医師たちも、ミンダナオ子ども図書館の事は良く知っており、特別価格で、時には自分の給与を抜いてボランティアで診察してくださいます。

現地は、普段はとても平和で、山中には天然の温泉も湧出している住みよい環境の街です。暑くもなく寒くもなく、老後を過ごすには最高！

読み聞かせで、心を癒やす子供たち

しかし、外国人が少ないだけに、フィリピンの他の地同様に誘拐の可能性も無きにしも非ずなので、訪問者の方々には、敷地外に出るときには、必ずスタッフが同行することを訪問者の規定にしています。

。といっても、現地に入って15年、危険な目に遭ったことは無いのですが・・・。

年４回行われる、総会に集まってきた奨学生達。
文化祭の後に、昼食で栄養補給！

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

ミンダナオ子ども図書館は、図書館と言ってもいわゆる移動図書館で、本部に住みこんでいる子供や若者たちが、週末などに4WDのピックアップに箱に入れた絵本を積んで、戦闘避難民のいるイスラム地域や極貧で3食たべられない山奥の先住民族の集落に、時には、舟に乗り、時には馬にまたがって読み聞かせに行くのです。

また図書館活動以外にも、スカラシップ（奨学制度）、医療に加えて、保育所建設や植林、そして子供の保護施設、戦争の時の避難民救済活動や避難所として許可も得ています。そういう意味からも、現地ではNGOと呼ばれています。

しかし、一般的なNGOとの違いは、活動で主役をつとめるのが、スカラシップで学校に行かせてもらっている若者たちであることでしょう。

現時点でスカラシップは約600名弱で、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民がおよそ均等になるように選択しているのですが、貧困率の高い先住民族が比較的多く、次に戦争地域のイスラム教徒の順番です。

この子も今は奨学生に

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、採用の基準は成績ではなく、生活環境の厳しさを優先します。

特に、孤児、片親の子といった崩壊家庭の子たちが選ばれますが、両親がいても兄弟が多く三食たべられない極貧の子たちや、学校まで遠くて通えない子たちも対象に入っています。

選考には、必ず私（松居友）がその子の住んでいる集落まで足を運び生活環境を把握して、さら子供とその保護者や村人たちに、現地の状況や子供の置かれた立場を説明してもらい、納得してから選択します。

現地に住みながらも、何とか学校に通える子は、なるべく故郷に住みながら学校に行かせますが、親がいなくなり周囲の人々からセクシャルアビューズを受けていたり、虐待されていたり、三食たべられず、さらに学校まで4時間以上もジャングルの中を歩いて通わなくてはいけないような子たちは、本人が望み、保護者が了解すれば、ミンダナオ子ども図書館の本部に住むことができます。

マノボ族の家

帰りたくなれば、翌年帰れるのですが、住みたい子が多く、現在約80名の子供たちが、本部に住み、また山の男子寮と女子寮の下宿小屋には各20名、そして町に有る大学生と高校男子の下宿施設には50名ほどの子供たちが、スタッフである寮母といっしょに住んで学校に通っています。

現在スタッフも25名ほどいて、ソーシャルワーカーや経理も含め、そのほとんどは卒業生たちです。集計すると約200名ぶんの食事をまかなっていて、一日100キロの米が消費されるのですが、水田を購入してかろうじて自給しています。食材の野菜も、子供たちが頑張って植えています。

今、今後の10年の計画を、スタッフや子供たちと考え相談し、実行しようとしています。

一つは、自殺率の高い日本の子供や若者たちが、現地を訪れて見事に心を回復していく様子をみて、孤独な中高年も含めて、癒やしと体験の場として、日本の人々に門戸を開くことに決めました。ただ私たちは家族であって、お客様では無く友人、家族の一員として受け入れたいので、寄付は受けても、宿泊費はとらず、スタディーツアーもやりません。

子供への愛と友情が、ミンダナオ子ども図書館のビジョンですから。

MCLに来られて良かった！

詳しくはウエッブサイト参照
「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm
フェイスブック：松居友
松居友メール：mcltomo@yahoo.co.jp

連載童話　野菜売りの少女

松居友

最終章

しかし、ちょうどそのとき、もう一つの歓迎会が行われていることを、ギンギンは何もしらなかった。その歓迎会は、大きなファイアーツリーの下にある、大岩のまわりで行われていた。岩のまわりに集まっていたのは、おおぜいの妖精たち。さまざまな色の服をきて集まって来た妖精の数は、千をはるかに超えていた。

大岩のうえには、マオンガゴン酋長が立っている。紺色の生地に、いちめんに刺繍がはいった服をきて、刺繍がほどこされた茶色のズボンをはいて、姿もしぐさもりりしく、かっぷくの良い酋長。隣には、カンコンとタクワイとパコパコの妖精たち。後ろには、色とりどりの服をきた、7人の男の子の妖精たち。

マオンガゴン酋長は、大岩の上から、まわりに集まって来ているおおぜいの妖精たちに向かって、よくとおる声で語りかけた。

「今日は、マノボ族にとって神聖な祭りの日。ここに、マノボ族いがいにも、さまざまな種族、さまざまな妖精のみなさんがたに集まっていただけたことを、心からうれしく思います。このミンダナオが、たくさんの妖精がすむ、平和で自然豊かな土地であることを祈って、今宵は、みなさん方と、おおいに歌い、踊り、語り明かしたいと思います。」

周囲から、大きな拍手がおこった。

拍手がおさまると、マオンガゴン酋長はつづけた。

「みなさんもすでにご存じのように、この特別な日に、わたしたちは、新しい方をここにお迎えできる喜びで、胸がいっぱいです。あらためてここで、みなさんにご紹介します。」そういうと、マオンガゴン酋長は、大岩のうえから、下に向かって両手をさしだした。

すると、大岩のすぐ下にいた、刺繍のはいった黄色い服と、首や胸や頭に美しいビーズの飾り物をまとった、年かさの女の妖精が一人、フワッと宙に浮いたかと思うと、酋長のさしだした両腕にひかれるように岩の上まで昇ってきた。

女の妖精は、酋長のまえに立つと、その手をにぎっていった。

「マオンガゴン酋長。ようやくわたしは、こちらに来ることができました。ほんとうに、うれしくってうれしくって。この気持ちをどうあらわしたらよいのかわかりません。」

近くにいた、カンコンとタクワイとパコパコの妖精が、女の妖精の手をにぎった。女の妖精は、こがらなカンコンとタクワイとパコパコの妖精たちの肩を抱きながらつづけた。

「ここにいらっしゃる皆さん。そしてとりわけ、カンコンさんとタクワイさんとパコパコさん。ストリートチルドレンになって、わたしの孫娘を救ってくださった、7人の男の子の皆さん。

また何よりも、わたしたちを導き、最後には浮浪者の姿にまでなって、孫娘のギンギンとクリスティンとジョイジョイを、MCLに導いてくださったマオンガゴン酋長。あなた様のおかげで、貧乏でしかも父親のいない孫娘たちも、念願の学校に行くことができることになりました。将来彼らが、わたしの娘や孫たちを助けてくれるでしょう。母であるわたしの娘も、とてもよろこんでいます。

それにくわえて、アポイアポイ村で、戦争にまきこまれていた長女とその赤ちゃんまでも救ってくださったこと、感謝の言葉も・・・。」

そこまでいうと、女の妖精は、言葉につまった。目からは涙があふれ出し、キラキラ光りながら、岩の上におちた。

まわりの妖精たちは、感動して見あげている。

マオンガゴン酋長は、女の妖精にそっと近づくと、両肩に手をかけていった。

「待っていましたよ。みんな待っていましたよ。あなたが、こちらの世界に来られるのをね。

何の罪もないのにわたしが殺され、先祖伝来の土地も失ってしまった後、妻をささえ、家族をささえ、本当に苦労のれんぞくでしたね。しかし、これで妻も娘たちも、自分たちの力でがんばって生きていくことができるでしょう。」

そこにいるすべての妖精たちが、ギンギンたちのおばあちゃんと、マオンガゴン酋長に向かっていっせいに拍手を送った。ギンギンたちの殺されたお父さんである、マオンガゴン酋長はいった。

「さいごに、娘たちをひそかに導き、言葉をかけ、はげましてくだっ妖精のみなさんに、心から感謝します。」

集まってきた妖精たちは、妖精の世界に生まれ変わったおばあちゃんにむかってさけんだ。

「マノボファミリーにようこそ！」

「妖精の世界にようこそ！」

終わり

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になっても治せないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、**医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援**・・・自由寄付
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と１２月には、絵本をお送りします。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つかっていないにも関わらず放っておけず採用している１４０名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている２００名ほどの奨学生の食費、生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

２，**植林環境支援**・・・６万円（ゴム、カカオの木６００本、１ヘクタール、現地作業代）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。

３、**保育所・下宿小屋建設支援**・・・９０万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）
総コンクリート製をご希望の方は、１３０万円で可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は、修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み生活を保障（現在８０名)。
支援には学費の他に、食費、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

１，**大学生スカラシップ**・・年額７００００円（月額５８３３円）
（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）

２，**高校生スカラシップ支援の方へ**・・年額６００００円（月額５０００円）

３，**里子支援（小学生）**・・・年額４００００円（月額３３３３円）

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」と書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。その後、機関誌に同封して本人からの手紙(英語)、６月にスナップ写真、８月に成績表、１２月にはカードが届きます。
プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して渡します。
小学生の里子の場合は、手紙はありません。プレゼントは可能ですが、文通は出来ません。
事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、FAX で日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCL に宿泊していただき自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。

メール：mcltomo@yahoo.co.jp 電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines